

仕上材料の違いによる住居床のヒエラルキー感について (2)

○ 正会員 國光 美代・
岩井 今朝典・
直井 英雄・

—ヒエラルキー感に関する追加検討および床段差との関係に関する検討—

■研究目的■

住居の床に対して、我々は「畳が最も上位で板の間はそれよりやや下、土間はかなり下位である」などと漠然と序列を判断している。これには個人差もあろうが、日本人全体として一定の傾向があるのではないかと思われる。本研究では、この床の階級又は格についての序列の感覚をヒエラルキー感と称することとし、これを定量的に把握することを目的としている。昨年はこのヒエラルキー感を定量化し、かつその説明資料として床材料と履き物、及び人間のとる姿勢との関係について調査したが、本年はこれに引き続き、ヒエラルキー感が調査対象や分析手法の違いによってどのような影響を受けるのかを捉え、かつ、この感覚の心理的要因を分析することとした。また、この序列の感覚がそれに応じた適当な床段差を要求するのではないかと考えにもとづき、床段差そのものの違和感と床仕上げ材と床段差の組合せによる違和感を捉える実験を行い、ヒエラルキー感と床段差との関係について分析した。

■ヒエラルキー感に関する追加検討■

〈1〉調査・分析方法

a) ヒエラルキー感を捉えるための調査：大学生25人（男性18人、女性7人）及び40歳代以上の通常の日本人15人（男性8人、女性7人）を対象に、畳、じゅうたん、板、CF、Pタイル、陶・磁器質タイル、モルタル仕上げ、土、の8つの床材料の格の上下感について一対比較法^{*1}による5段階と3段階評価のアンケート調査を行っ

た。この結果から床の序列を数量化し、昨年の調査結果との違いおよび評価手法の違いを分析した。なお、昨年の調査対象者は大学生25人（男性24名、女性1名）であった。

b) 序列に関わる心理的要因の分析：上記アンケートでの5段階評価の結果を用い、因子分析法^{*1}により序列に関わる心理的要因を分析した。

〈2〉結果および考察

図1、図2は、床の序列の主効果^{*1}・^{*2}を数直線上に表示したものである。まず図1を見ると、昨年と今年の大学生とでは床材料の序列はほぼ変わらず、学生と40歳代以上では、一部に逆転はあるが、全体的にはかなり似ている。男性と女性との比較でも年齢ほどの違いは見られない。図2から、5段階評価と3段階評価という手法の違いについても差がないことがわかる。以上から、この感覚はここで検討した調査対象や分析手法の範囲では、その違いにはほとんど影響されないかなり安定した感覚と考えられる。図2から、5段階評価と3段階評価という手法の違いについても差がないことがわかる。

表1は最も説明力の高い因子について、各項目の因子への関与度を示す因子負荷量^{*3}を表し、表2は同じく各属性の因子への関与の強さを示す因子得点^{*3}を表したものである。この結果を見ると、この因子は、あくまでも推測ではあるが、「肌に近い—肌に近い」という因子ではないかと考えられる。

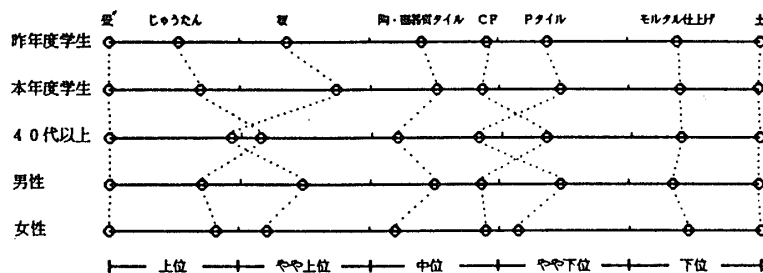


図1 調査対象の違いによる床の序列の違い (5段階評価)

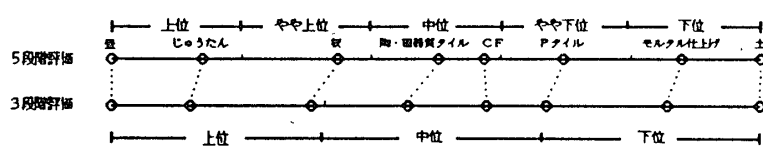


図2 手法の違いによる床の序列の違い (本年度学生)

表1 因子負荷量 (因子1)

材料名	因子負荷量	-1	-0.5	0	0.5	1
じゅうたん	0.5174				■	
畳	0.4212				■	
CF	0.3922				■	
Pタイル	0.2376				■	
板	-0.1060					■
陶・磁器質タイル	-0.1956					■
モルタル仕上げ	-0.7360					■
土	-0.7983					■

表2 属性別因子得点表 (因子1)

対象	因子得点	-2.5	-1.5	-0.5	0	0.5	1.5	2.5
本年度40代以上	2.1538						■	
昨年度学生	-0.5170							■
本年度学生	-0.7730							■
男性	0.5792						■	
女性	-1.9306							■

A study on Japanese hierarchical sense to dwelling floor by finishing materials(2)

—An added study on this sense itself and a study on relation to difference of floor level—

KUNIMITSU Miyo, IWAI Kesanori and NAOI Hideo

図ヒエラルキー感と床段差との関係に関する検討図

(1) 実験方法

a) 仕上げ材を考慮に入れない床段差における違和感についての実験：大学生40人を被験者に、仕上げ材の影響をなくすため、灰色のカッティングシートを貼った0、1、2、4、6、8、10、13cmの床段差を、段差がある場所でスリッパを脱いでから登って進む(A行動)、段差がある場所で降りて履いてから進む(B行動)、履いたまま段差を登って進む(C行動)、履いたまま段差を降りて進む(D行動)の4行動をとらせ、違和感の有無を聞いた。

b) 仕上げ材が異なった床段差における違和感についての実験：大学生30人を被験者に、畳、じゅうたん、板、CFの4種の仕上げ材間の床段差を0、2、6、10cmとして、実験aと同様に行った。

(2) 結果および考察

図3は実験aで各行動において感じる違和感を示し、図4、5は実験bでA、C各行動において感じる違和感を段差ごとに示したものである。図6、7は、A、C行動各2cmにおける床段差の違和感を例に、実験aとbを比較したものである。

図3を見ると、スリッパを着脱するA、B行動は、ある範囲の段差の時に違和感が最小になるが、C、D行動では、高くなるにつれて違和感が増していく。図4を見ると、段差の上下が仕上げの序列と逆になっているほど違和感が強く、図5を見ると、畳が関わる床材の組合せは全て違和感を感じる。図6を見ると、仕上げ付きの段差は、段

差そのものの違和感に比べ、序列差の値が高くなるほど違和感を感じさせず、反対に序列差の値が低くなるほど違和感を強めさせることが分かる。図7では、段差そのものの違和感よりも全て違和感が強まり、これは段差のある異種の仕上げの上をスリッパを履いたまま歩く状況があまりないためと思われる。

まとめ

本研究により、床仕上げ材料による住居床のヒエラルキー感は、調査対象や手法の違いによる差が余りないことがわかった。さらに、ヒエラルキー感をつくりあげているが心理的要因として、肌への近さと清潔感のふたつが大きいと考えられる。また、床段差に対する違和感は、床仕上げ材の組合せに影響され、中でも畳の存在は別格であることがわかった。なお、研究に際しては、平成4年度理科大学大学院生川村かお里氏の協力を得た、ここに記して謝意を表する。

参考文献

- 1) 「統計解析シリーズ」 株式会社 社会情報サービス
- 2) 佐藤 信：「官能検査入門」 日科技連
- 3) 海保博之：「データ解析入門」 日本文化科学社
- 4) 川村かお里 他：仕上げ材の違いによる住居床のヒエラルキー感に関する一分析 1993年度 建築学会大会梗概 5492

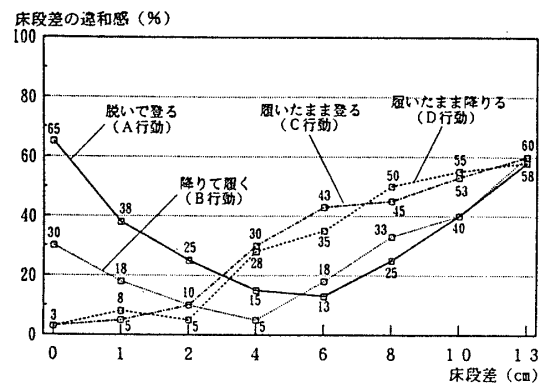


図3 仕上げ材を考慮に入れない床段差における違和感

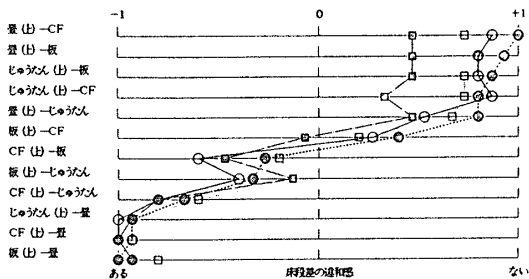


図4 A行動における床段差の違和感の割合

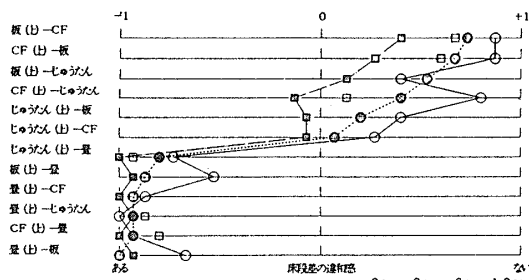


図5 C行動における床段差の違和感の割合

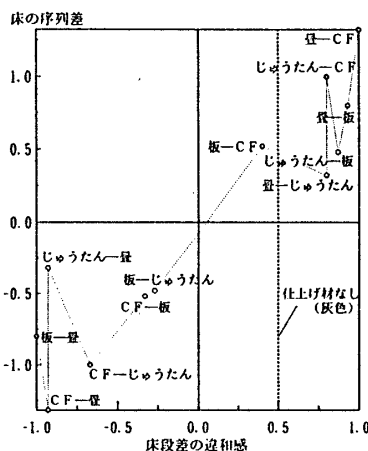


図6 A行動2cmにおける床の序列差と床段差の違和感との関係

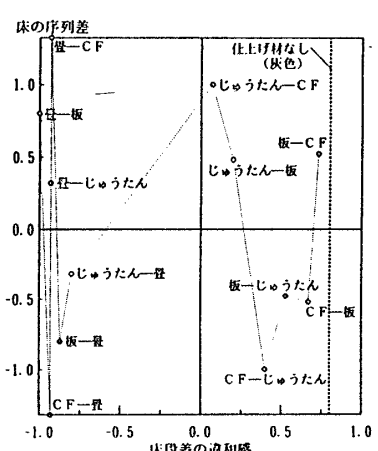


図7 C行動2cmにおける床の序列差と床段差の違和感との関係

* 1 東京理科大学大学院生
* 2 東京理科大学助手
* 3 東京理科大学教授・工博

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Eng, Science Univ. of Tokyo.
Teaching assistant, Dept. of Architecture, Faculty of Eng, Science Univ. of Tokyo.
Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Eng, Science Univ. of Tokyo, Dr.Eng.